

論文審査の結果の要旨

論文提出者 相原健志 (あいほら やすし)

相原健志氏の論文「戦術、「翻訳」、出会い – 戦術的ピリオダイゼーション、あるいは社会的組織化の過程としてのトレーニングと試合をめぐるマイクロ人類学」は、サッカーチームを一つの「小さな社会」と捉えたうえで、その動的な社会的組織化の過程を明らかにしようとしたものである。これは、戦術的ピリオダイゼーション (PT) と呼ばれるトレーニング理論を、人類学の理論を用いて捉え直すという、筆者が「翻訳」と呼ぶ理論的検討を基礎に、PT を用いるサッカーチームの事例を詳細に記述することによって、ひとつの「マイクロ人類学」を作り上げようとしたものである。

本論文は、「はじめに」と「終章」に挟まれた第 I 部 (1～3 章) と第 II 部 (4～8 章) からなる。まず、第 I 部は、人類学的な概念や理論と突き合わせることで、PT の理論を人類学的な概念に変容させる部分である。

第 1 章では、PT の理論的な概要を整理したうえで、PT 理論を人類学化する手続きとして、人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロの「翻訳」という操作を方法論的視座とする、本論文の基本的な立場が示される。

第 2 章では、「戦術と複雑なシステム」という概念を中心に、行為の集団性と、それが埋め込まれている環境という観点から、PT と人類学的実践理論を突き合わせ、両者の間の共通点と相違点を取り出している。

第 3 章では、PT におけるトレーニングと試合の過程が、複雑なシステムに晒されつつ刻々と変化していく行為者たちの「情動」と「表象」が具体的なプレースタイルを基準として連結される過程であると「翻訳」される。PT のトレーニングは、環境・行為・プレースタイル・情動・能力の変化の可能性を肯定したうえで展開される「出会いの組織化の過程」であるとするのである。

第 II 部は、人類学的な理論へと「翻訳」された PT 理論を、具体的な事例と付き合わせていく部分であり、ポルトガルのサッカークラブ FC フォシュ U17-A チームの 2013～2014 年シーズンのトレーニングと試合の過程を事例として、人類学概念に「翻訳」された PT 理論を検討する。

まず、第 4 章においてこのチームの基礎情報を整理したあと、第 5 章におい

て、PTにおけるトレーニングメニューは、その強度が心身の疲労と相関するかたちで調整される様態の観察をとおして、トレーニングの根幹的条件として、「選手たちの能力の有限性」と「トレーニングの時間の有限性」を取り出す。

第6章では、選手の協働・組織化に関わる戦術的問題である「他の選手とパスを繋げられない」という「恐怖」に対して、いかに解決が図られたかが論じられている。そして、トレーニングと試合の内容の検討をとおして、PTがめざす「出会いの組織化」は、選手の配置、攻撃・守備といった時間、選手の有限な能力への考慮をとおした「複数の個体の高次な一つへの個体への合成」であることが明らかにされている。

第7章では、選手たちの情動と表象を検討することをとおして、「プロになろうとするモチベーションの欠如」などの選手個人の事情によって、選手の戦術的強度が低下し、連関した「出会いの組織化」の不安定性が露呈する場合もあることが明らかにされる。

そして第8章では、「出会いの組織化」を試合で発揮して望ましい未来を迎えるか、「脱組織化」を試合で示して好ましくない過去を再現するかという、「未来」と「過去」がトレーニングには潜在的に含まれており、そのどちらが現れるかは、要求される戦術的強度を最大限に生き抜けるか否かという、トレーニングの「現在」によるものであると結論づけられている。

本論文は、スポーツの研究においてしばしば見かける、個人の技術を中心におく身体論に陥ることなく、トレーニングメニューの提示・遂行、試合における行為とその評価を実地に検証することをとおして、言語化が困難なサッカーの協働的な実践そのものを人類学的に呈示して見せたものである。この点は、審査員全員による高い評価を受けた。

また、PTを採用する人々自身が語るができなかったものを、人類学の概念を用いて言語化したこと、そして特別な実績を持たない「普通の」チームを対象にすることによって、PT研究を単なる成功物語とせず、分析の広い適用範囲を確保したことも評価された。

一方、この論文における議論の中心部分をなす「翻訳」という手続きが論文全体で十分に活かされているかどうかについて、審査員から疑義が出された。

しかし、疑義が出された点も論文全体の価値を大きく損ねるものではないと判断し、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。